

た魂の代として、お金もすつかりで御座いますよ。ところが何にもお取りにならないのですもの。尤もあの方だからこそああしていらないと仰るのね。本統にあの方だからこそですわ。

主人。(登場、手に帽子を持つてゐる)おやヘレナかい。さあすぐに風呂へ飛び込むのだ。それから體につけて行つたものはみんなとつてストオブで燃すこつた。おい、女中はどうした、風呂だ、風呂だ、あのピマめ、あれでも女中の氣でゐるのかな。まるで神話の女だ。

夫人。まあそんなにおあはてにならなくつても宜う御座いますわ。お風呂はもういつでも入れますわ。私すつかり致しま、から。

主人。さあすぐお出でよ。コレラといへば冗談事ぢやないからな。

夫人。(退場) すぐ参りますよ。

主人。(夫人を戸口へ送る。その時不安さうに横から寡婦の方を見る。寡婦は罪でも感じたやうに頭を深く垂れしよんぼり立つてゐる。主人はあちこちと歩いて) メラニイさん、實際今日なんか所謂くさくさした日といふのでせうね。

寡婦。(小聲で) はい、まことに。

主人。又コレラといふ奴が悪い時分にやつて來たもんですね。

寡婦。本統で御座いますね。しかも急に。

主人。それから家ではおまけに冷却器迄壊れてしまつて。

寡婦。あなた、どうぞ勘忍して下さいましな。

主人。(疑るやうに) さう仰ると。あなたは全體何の話をなさるお積なんです。



寡婦。私があなたに申上げた事はすつかりお忘れになつて下さいましな。  
主人。(うれしさうに) 眞面目にですか。

寡婦。ええ、眞面目ですわ、私は本統におばかさんで、厚かましくて。

主人。メラニイさん、僕はあなたを愛してゐるのですよ。といふのはあなたを尊敬してゐるといふ意味ですよ。實際あなたは驚くべき素質をお持ちだ。人として完全ですよ。あなたはすべての物に暖い興味を持つてゐられるがね、メラニイさん、あれは餘計ですよ。といふのはあなたが僕に言はれた事ですね、あれはみんな不必要ですよ。お互に仲のいい友達ではあつて欲しいがそれ以上はいけません。人間といふものはすべて友達でなければなりません。ねえさうでせう。

寡婦。あなたのお顔を拜見すると、私もうお耻づかしくて。

主人。もうそんな話はやめとしませう。さあ手を握らして下さい。これで好い。メラニイさん、人間といふものは實際みんな好い人ばかりですからねえ。お互に理解する丈の多くの素質と、深い理性と、立派な天才が人間の間には備つてゐるのです。僕は人間を愛したいといふ心持で一杯になつてゐます。全く面白い動物ですからね。

寡婦。(笑ひ乍ら)私にはまだ人間といふものが良くは分りませんわ。私は商人の間で暮してきた者で御座います。連れ合と申すのは肉類を商つておりました。あなたのお傍でこそ初めて私は世の中の人といふものが漸く分つたので御座います。そこで私はすぐにその一人の方を買はうと思ひましたんで。

主人。と仰ると。



寡婦。どうぞ私の申上げる事なぞお耳に止めないで置いて下さいまし。私  
はもう。

主人。(元氣よく) それではと。どうです、お茶にお出でになりませんか。  
寡婦。恐入ります。では私奥様の所へ上つて一寸顔を直して参りますわ。  
主人。ぢや僕はお茶の用意をさせて置きませう。實は僕の冷却器が壊れた  
んです。それで困つてゐるのですが、錠前屋の所ではかみさんが病み付  
いて、之を直してくれる奴がゐないときてゐるのでせう、お蔭で今日は  
勉強の方がお留守です。(笑ひ乍ら自分の部屋に行く)

寡婦。(主人の後に随ひ) 可愛い方だわ、本統に。(夫人の方に行く。)  
乳母。(食堂から登場、腹立たしげにぶつぶつと) まるで獵に行く犬が家の  
中を馳けて通るやうだ、何もかもめちやめちやに抛り出して置いて、明け

放しで。一寸も外へ出る暇つてありやしない。ほんにあのほとけ様のお  
傍だけが物事がきちんとしてゐる。あのお墓のある所だけが、あすこ丈  
が靜になつてゐる。(テラスの入口から主人の妹と獸醫登場) リイザさ  
んあなたお茶と乳と上りましたかい。

妹。(激して) 黙つてて頂戴、あつちへ行つてよ。

乳母。(退場) あすこに御座いますからね。

獸醫。ではそれでお了ひですか。

妹。はい、もう以上申上げる事は御座いません。

獸醫。ああさうですか、なに僕はあなたが誤解してお出でだと思つたもの  
で、それで此話を初めたのです。

妹。私の病氣はちつとも觸りになるものでは御座いません。私は自分の病



氣をちつとも恐れてはおりませんのよ。然し私は子供といふものを持つ事も出来ませんし、持ちたいとも思ひません、世の中の人には誰も自分の生れて来た理由を、自分に向つて尋ねたものは御座いません。けれども私はそれを自分に尋ねてみました。たとへ世の中は廣いといつても、決してこの地上の全生活を自分の生活にする力のない者の存在を許してはおりませんわ。あなたそれでは御旅行にお出掛けなさいますの。

獸醫。(靜に) ええ、出かけますよ。(畫家テラスより登場)

妹。それは宜う御座いませうが、でも赤の襟飾丈はおよしなさいませよ。餘り俗ですもの。あなたが今日もそれを掛けてゐらつしやるのを拜見すると、私堪らなくなりますのよ。

畫家。この天氣ときちやまるで十月ですな。

獸醫。左様さ、べらぼうな天氣ですな。

妹。御旅行はどちらへゐらつしやるの。

獸醫。僕ですか、モヒレエフ總督府の方です。

妹。(心配さうに) 又なぜそんなお所へ。

獸醫。あすここには馴染の顔が澤山おりますから。

畫家。モヒレエフへ行くつて、よく洒落て死出の旅路といふ事をそんな風には申しませんかね。

妹。(戰慄) まあ飛んでもない事を仰るのね。

畫家。こんな冗談でびつくりなさるのですか。何ぼ何でもこの先生が死ぬなんて、あなただつてお考へぢやないでせう。まさか鐵砲玉でも飛んで来て、頭に當る譯ぢやありませんまい。



妹。(非難するやうに、不安の様子) なぜそんな事仰るのよ。

畫家。早い話が、僕はどこかの獸醫先生で鐵砲自殺をしたといふ驗を聞いた事ありませんから、まあ安心してゐらつしやい。

乳母。(食堂から) リイザさん、お茶をお願ひ致しますよ。(妹黙つたまま  
で退場)

畫家。僕も随分人が悪いでせう。リイザさんを苛めるのが大好きなんですからあの人は世の中を悲觀して面白がつてゐるのですからね。世界苦論者ときては厄介な代物だ。それに僕はあらゆる不健全なものに對して有形的嫌惡の情を持つてゐるのですからね。

獸醫。ところで君の『太陽へ行け』とか何とか言つた名前だが、あの繪は描いてゐるかね。

畫家。勿論。すばらしい着想ですよ。さうさう、それで忘れてはならない事があるのだが、あの繪に君が必要なんだ。

獸醫。(驚いて) 僕がだつて。その繪の船の上にはとても僕の乗れさうな場所はありませんよ。それとも下の方の荷物倉あたりですかね。

畫家。(獸醫をためすやうに眺めて) 君の目の上には剛愎と言つたやうな皺があるが、それが非常によく君の性格を現してゐる。僕は君を捉へておくが、差障りはあるまいね。

獸醫。しつかり捉へ給へ。  
畫家。(スケッチブックを取出して) すまない、ほんの少しの間だ。(スケッチする)

獸醫。君はかう一寸アネクドオトといふやうなものは面白がる方かね。



畫家。さあね、あんまりばからしくさへなければ

獸醫。では一寸お裾分けするかなあ。

畫家。それは是非頼む。スケッチする間には用なしだからね。

獸醫。用なしと言つてしやべつてゐるね。いいかい。いつだつたか英吉利の公使がドオバアからカレエの海峡を渡つた時だ、その時甲板に佛蘭西人がゐたとさ。所がこの先生達英吉利人と佛蘭西人とどつちが好いつて自慢から口論をやり出してね、その英吉利人の言ふには、世界至る所として英吉利人を見ざるはなしとやつたね、それに對する佛蘭西人の返答はかうだ、いやこの海峡には幾多の佛蘭西外交官が溺れて沈んでゐるが、未だ一人の英吉利人はゐやしないだとさ。それがどうだらう、その話がある若い英吉利人が公使から聞くと、忽ち甲板の上からどぶんとね、飛

び込んで死んだとさ。

畫家。(間をおいて) ふん、それから。

獸醫。それだけさ。

畫家。それがアネクドオトかい。

獸醫。さうとも、君はどう思ふ、國民の名譽を救はんが爲に水に飛び込んだのぢやないか。

畫家。いや、君のそのアネクドオトが海上で演ぜられたにしても、鹽分が缺乏してゐるね。

獸醫。君の襟飾は面白く結べてるよ。

畫家。お氣に召したかね。ある貴婦人が教えてくれたのさ。

獸醫。色も好いよ。



主人。(登場)繪はここでやるのですか。家内はまだ見えませんか。御存知かも知れないが、あいつ今日コレラ患者の所へ行つてきましたよ。  
畫家。へえ。

主人。その患者といふのはあの錠前屋のかみさんでね。君はどう思ひます。  
畫家。少くとも亂暴だね。であなたはそれを許したんですね。

夫人。(登場)ではそんな事は宜くないので御座いますか。  
畫家。でもあなたのするべき事ぢやないでせう。

夫人。それは又なぜで御座いますの。私の致したい事なら、私が致しても宜しいぢや御座いませんか。  
畫家。奥さんはまあ、いや、そんな理窟はおれには分らん。

主人。君、君、家内はあれで中々しつかり者だよ。之丈はどんな心配があ

つても言つておかなければならん。お前滴劑を飲んだかね。  
畫家。(スケッチを終り)さあ之で好い。すまなかつた。全く君の顔は素敵だ。

獸醫。ばかに持ち上げるときてゐる。

妹。(食堂から登場)どうぞお茶が入りましたから

畫家。ぢやあ頂くとしませう。(獸醫の腕へ自分のを押し込んで二人退場)

主人。(小聲で)おい、おれは少しお前に話がある。

夫人。まあ何で御座いますの。

主人。(急いで)何ね、ばかな話さ。そらメラニイさんがね。もうあの人は行つてしまつたかい。

夫人。(笑ひ乍ら)お見えにはなりませんよ。



主人。おいおい。笑ひ事ぢやない、實はあの女がおれにラヴしてゐるのだ。よくあるやつさ。お前どんな心持がするね。何もおれがあの人にそんな刺戟を與へたといふ譯ぢやないが。おいおい、何がおかしいのだ。之は眞面目に考ふべき問題だよ。堪らない話だ。お前に知れてゐなくつて幸だつたよ。メラニイさんがここへ來て泣き出すといふ騒ぎなんだ。そしておれのズボンへキスをしたものだ。それからこの手へ、それから。夫人。(笑ひ乍ら) おやおや、もう澤山ですよ。

主人。(やや憤然と)之は驚いた。お前に言ふがね。メラニイさんは本統に眞面目に言つてゐたのだよ、自分の持ち物はみんなおれに呉れ様といふのだ。私はあなたと御一緒に暮したう御座います、こんな事を言つてゐるのだ。分つたかね、メラニイさんはおれを極く親しさうにあなたやつ

て呼ぶのだけ。だが決しておれがあの人にそんな權利を認めたと思つてくれちや間違ひだ。おれには譯が分らないのだが、どうもあの女の體は硝酸ポツタシウムの匂がする。

夫人。(心の底から笑つて) まあおかしな事を。本統にあなたはおかしいわ。

主人。(稍傷心の様子) なぜだね、堪らない話ぢやないか、笑ひ事所ぢやありやしない、ばかげてゐるが全くびつくりしたよ。返事は何とかしておいたが、おれの頭の中はめちやめちやだつた。だがあの女は眞剣な物の言ひ方をしてゐたよ。メラニイさんの言葉ではお前が萬事心得てゐるといふ話だつて、さあ何の事やらおれには分らん初めはお前にそんな話をしない積でゐたのだが。



夫人。(やさしく) あなた、私には何もかも分つておりますのよ。

主人。お前分つてゐるのだつて。それなら何だつておれに豫めさう言つて置いては呉れなかつたんだ。

夫人。(何事かを思出したやうに冷淡に) そのお話は晩方迄お預り願ひませう。

主人。無論好いが。ではお茶としやう。先づお前にも聞いて貰つて気が晴晴する。ではこのごちやごちやもお前一人で巧く捌いてお呉れだらうね。どうだい。

妹。(食堂から) 姉様、お出でになりませんの。

夫人。今行つてよ。

主人。では何もかも任せたまよ。

夫人。承知しましたわ。あなたも御心配なさらないうやうにね。では参りませう。

主人。メラニイさんを抱き起した時に気が付いたが、腋の下に。(あとは小聲に囁く)

夫人。まあ、いやなこと。(舞臺暫く空虚。食堂から人の聲や皿、ナイフ、フォオクの打合ふ音する。)

獸醫。(かう言ひ乍ら現れる) ここで一服とするかな。(両手を脊へ廻し乍ら窓際に行き、紙巻煙草を口から離し小聲で唄ふ。『闇の中なる金の雲』か。(震へた粗い聲) ふむ。『闇の中なる金の雲』。

畫家。(登場) 『險しき山に懸りけり』かね。僕も追ひ出されちまつたよ。あの部屋ちや喫煙を禁ずだとさ。



獸醫。してみると君もやつぱりアネクトオトの愛好家なんだね。

畫家。だがあの面白くないやつはもう眞平だ。

獸醫。君に聞かせるのに一つ飛切りを考へておくよ。だが今は館へお戻りだ。

畫家。いつ伺へるね、さうすると。

獸醫。明日さ。おや雨だな。(自分の蝙蝠傘を探して)かうもりか、かうもりに非るか。まるで丁抹の王子ハムレットの意氣だな。ぢや失敬するよ。

畫家。(その腕を捉へて)君旅行に行くといふね、僕の聞いた所では。

獸醫。(笑ひ乍ら)出かけるよ、出かけなくつちやゐられないんだ。

畫家。(同様に笑ひ乍ら)ではね、無事に行つて來給へよ。今日は何だか君がばかに氣に入つちやつたんだ。

獸醫。こいつは痛み入る。

畫家。君に惚れたんだよ。何かしら、君は今迄にラヴした事があるかい。

獸醫。學生の時分下宿のおかみさんに少し參つた事があるがね。おまけに好い時期をねらつて當つてみたんだ。

畫家。綺麗な人だつたのかい。

獸醫。そいつを言ふのは困難だが。もうその時分五十幾つといふ年だつたよ。僕の胸を打明けてみたら、ばあめ月々僕のを三ルウブル宛値上げしやがつた。

畫家。(笑ひ乍ら)本統かい、それは。

獸醫。全くなんだ。どれもう失敬するよ。(笑ひ乍ら食堂へ退場)

畫家。(考へ込んで見送る。やがて煙草をふかし乍ら室内をあちこち歩き、



何やら口の中で呟いて頭を振る)

乳母。夫人の居間から登場、獨言のやうにぶつぶつと)もうよその方はお歸りと思つてゐました。

畫家。誰です、よそのつて。

乳母。あの小露西亞の方よ。どちらへおらつしやいました。

畫家。家へ歸りましたよ。

乳母。あの方に出来る事と言ひましてはね、この宅へ行らしつてお茶を上つてそれでお歸りになる事丈ですよ。あの方の爲に娘さんが體を悪くしてしまひました。毎晩ちつとも寝ないのですからね。本統にあなたから少し仰つて頂けると。

畫家。その娘つて誰です。なぜ寝ないのです。それからあの男に何と言つ

たら好いのです。

乳母。旦那様のお妹さんといふたつた一人のお嬢さんで御座いますよ。それももう年頃ですからね、譯もなく落付かない時分です。それでなくても病身なので、そこへあなた方がそこいらをうろつき歩いて何でもしゃべり歩くのですもの。人間が自殺をし兼ねないものでもない位に心配をしてゐる事には、更にお構ひなしなんですからね。

畫家。(強く額をこすり考へに沈む。やがて頭を後へ反らして、ある決心を得たる様子)おい、君。

主人。(手に書物を持つて登場)ことだぜ。

畫家。(敵意あるやうに)何だつて一層にこに嬉さうな顔をしてゐるんだ。



主人。(驚いて) 僕を呼んだのはそれを言ふ爲かね。

畫家。君に言はなくてはならん事があるんだ。

主人。(あくびし乍ら) いやはや、今日はどいつもこいつもおれに用が有るとぬかす。談といふ談がみんなばかげてゐて。一として筋道の立つたやつなんぞありやしない。

畫家。では僕がその筋道のあるやつをお聞かせするかな。

主人。(本を眺め入り) まあさうえらがりなさんな。

畫家。とも角その本を置いて貰ひたいね。

主人。どこへだどうして。

畫家。そこいらへ置いとくさ。話といふのは實は。僕は君の奥さんにラヴしてゐるのだ。

主人。(靜に) おいおい、そんな事ではとても僕はびくともしないからね。

畫家。僕は君の奥さんにラヴしてゐる。僕は奥さんを一個の女として解釋してゐるんだ。

主人。(落ついて) ふん、それから。(戰慄して飛び上り) それで僕の妻は。

ヘレナはそれを知つてゐるのかね。君はもう家内にそんな事をしやべつたのかね。何と言つて返事をしたい。

畫家。もうちゃんと御承知なんだ。

主人。(不安になつて) へえ、それで。それでどういふ返事なんだ。

畫家。(混亂して) 今迄には、しつかりした事も聞かないがね。

主人。(嬉しさうに) そうれ、無論の事さ。僕なんかにはちゃんと分つてゐるんだ。さうなくてはならない譯だ。



畫家。(制して)だが待ち給へよ。實はかうなのさ。君が餘り奥さんに對してひどく當るものだから。

主人。(憤然と)僕がかね。またどうしてだ。僕がいつひどい事をした。

畫家。君は奥さんをさつぱり構はないぢやないか。奥さんの愛情を殺したといふものだ。

主人。(びつくりして)あいつがそんな話をしたのかね。

畫家。さうさ。

主人。(怒つて)失敬だが、今日は君どうしたのだ。一體今日は誰も彼も頭が變に成つてゐるのぢやないかな。あつちの方では僕は家内に目を掛けないと小言をいふ、こつちの方では妻が僕を愛してゐるとぬかす。まあどういふ事なんだ、全體。君達は丸で物が分らない。まるで氣違ひでも

出來さうな様子だ。妻は何とも言つてやしないよ。君達は一體どうしたといふのだい。僕にはさつぱり分らん。

畫家。おいおい、お互に幼な馴染の友達だからね、僕は君が好きなんだからね。

主人。出來るものならその友情をもう少しお手柔に願ひたいね。どうか誰にでも自分の事は自分で始末するといふ權利を許して貰いたいね。自分の地位を保護するといふ自由の爲だ。それを心得てゐたら誰でももうちつとちやんとするよ。

畫家。だがそれが分つてゐない奴はどうだらう。

主人。そんな奴を人間の籍に入れておく事は眞平だ。

畫家。又それをいやだといふ奴は。



主人。厭だと言つたら。なにそれはあり得べからざる事だよ。君少し言ひ過ぎるかも知れないがね、君もやつぱりそこいらの繪かきなぞと一列で、眞面目といふ點が缺けてゐるよ。昨日は何一つ言はないで、今日になつてから突然、僕はあの人をラヴしてゐるなんかと言ふのだからね。

畫家。もう君と話してはおれん。兎も角言ふべき事は言つたのだから、之で失敬するよ。

主人。いや待つてくれ給へ。僕は妻を呼ぶから。(呼ぶ) おい、ヘレナ。

畫家。(不安の様子) どうしやうと言ふのだい、なぜ呼ぶのだ。

主人。なぜだつて。ヘレナが君の御面前で事のいきさつを御説明申すのさ。

おい、聞いておくれたが。(夫人登場) このワギン君が(と畫家を指さし乍ら) 見る通りメラニイさん同様ラヴして御座るとさ。ところがね、お

前にぞつこん惚ん込んだといふ筋だぜ。(夫人畫家をけはしい疑ふやうな目付で見ると)

畫家。(激して) それからどうした。奥さん、僕は御主人にあなたをお慕ひしてゐるつてお話したのですよ。それからあなたが辛い目にお會ひだといふ事も。

夫人。之は濟みませんでしたこと。大層立派に男らしく仰つて下すつたのね。

畫家。(侮辱された感じ) 冷かされては堪りませんね。僕は何も御主人が仇だといふ譯ぢやありません。唯僕の意思に反して謀反氣がむらむらした丈です。僕がお氣に障るやうな事をやつたとすれば、それは友達の間  
の心易さと、それから愛の心持でやつた事です。僕にはばあやさんの言



葉が變に聞えたものだから、ついそんな風な事を仕出かしたのです。それから奥さん、あなたに何かお爲になる事をも思つたものですから、そんな氣持に勵まされたのです。お互の間には何もかもはつきりさせて置かうぢやありませんか。

夫人。有り難う御座います。

主人。だがワギン君、僕はついぞ他人の感情を害するやうな言葉を口に出した事がないよ。

畫家。いやもう失敬する。何れ又。

夫人。明日お出でになりました。

畫家。(退場) ええ、多分。

主人。(夫人を疑ふやうに眺めて) おいおい、お前はどんな心持だね。

夫人。あなたこそ。

主人。お前が落付いてゐてくれるから有難い。本統に飛んでもない日だ。

ではワギンがお前に思つてゐる事を言つたのかね。

夫人。はい、あの方私に仰いました。

主人。お前をラヴしてゐるのなんのと言つたのだね。

夫人。その『なんの』と申す方が多いのですわ。

主人。さうか。あの繪かきめ。それでお前はどうかと言つたのだ。

夫人。それはあれこれ澤山お話致しました。

主人。でお前はおれを愛してゐるとあの男に言つたかい。

夫人。あらそんな事は申しませんでしたわ。

主人。そいつは惜しかつた。そこを言はなくてはいけなかつたのだ。すぐ



から言つてやると良かつたのだがな、『私にはパウロと申すものが御座います、之が私の夫で御座いますよ』といふ風にね。あいつだつてさうなれば考へなければなるまいて。あの男がこの場合どう話の結末をつけるか、おれにはさつぱり見當がつかん。實際おれの知らない事だし。又大した事でもないからな。

夫人。ではあなたのお考へでは、一體どんな事が大切なんで御座いますか。  
主人。こんな騒ぎを二度とやつてくれない事さ。

夫人。あなたはあの繪かきさんの事を仰いましたねそしてあの人の代りに何か仰るお積りでしたね。それに何事も將來あなたに心配をかけてくれるなと仰せでしたね。そこで私の體の置場はどうなるので御座います。

主人。(不安さうに)といふと、お前のいふ意味はどういふんだい。

夫人。多くは申しませぬ。私はもうあなたに御用のない體のやうな氣が致しますわ。あなたの生活の中で私といふ者はどれ丈のお役に立つてゐるのでせう。あなたは私から遠くに立つてゐらしつて。私にはさつぱり譯の分らない方ですわ。一體私はあなたにとつてどういふ體なので御座います。妻が何をしてゐるか何を考へてゐるか一度といつてそれをお尋ねになつた事はありませんでしたね。

主人。おれがなぜそんな事を質問しなかつたかといふのかい。おれはそんな質問をする暇がないからさ。又なぜお前はそんな事を自分でおれに言はなかつたんだ。

夫人。(傲慢に)私は人間として、又あなたの連れ添ふ妻として、道理上私のものであるものを、何も乞食のやうに願ひしたくは御座いませぬも



の。

主人。(絶望して)おい、ヘレナ、それは少し酷いぢやないか。何處へ行つたつて誤解は付き物だ。だから之に註釋を加へる必要があるんだ、氣持の悪いものだがね。

夫人。あなたお腹立になつてはいやですよ。私は覺悟をしてあなたとお別れしたいと存じます。私は固く決心をしたので御座います。尤も胸の中でお別れしたのは遠い昔で御座いますけれどね。

主人。(戰慄して)おい、ヘレナ、飛んでもない。何處へ行かうといふのだ。お前はあの繪かきに惚れてゐるのだな。さうだらう。

夫人。いいえ、私はあの人と一緒に成りたい爲にお別れするのでは御座いません。

主人。(嬉さうに)そいつは有難い。だがおれを愛してもゐないのだらう。

さあ返事をしてくれ。さあ。

夫人。なぜそれが御存知になりたいのでせう。

主人。(心から)だつてお前が可愛いもの。

夫人。もういや、いや、そんなお話は。

主人。(確信を以て)ヘレナ、おれにも時間はないが、まあお聞き、おれは眞面目でいふのだが、お前は眞面目でそんな風に言つてゐるのぢやないのだらう。おれにはお前が病氣のやうに思へるのだ、どうぞおれを許してくれ。そんな病氣は忘れてしまつておくれ、おれを許しておくれ。お前に行かれてみる、おれはお前が何處にゐるのかどんな工合だか、しよつちう考へずにはゐられないのだ。それでおれの勉強はどうなる。お前はお



れの生活を破壊しやうとしてゐるのだ。おれの仕事はどうなるだらう。勉強をするか、お前の事を考へてゐるかおれにはこの二の内の一つ丈しか出来ないのだ。

夫人。(苦痛の様子)少しお言葉を謹んで頂きます。どうぞもう私の事は一言も仰つて下さるな、一言でも。

主人。(膝まづいて)一言もだつて。おれはお前に言つたぢやないか、おれはお前なしに生きてゐられないのだ。おれが悪いならどうぞ許してくれ。おれの生活の妨害をどうぞしないでくれ。人生は短い。しかも面白い仕事は澤山あるぢやないか。

夫人。その人生といふものが私に何を與へてくれますものやら。(耳をすます)あら、お静に。(廊下にどしどしと早い足音がする。主人びつくり

して飛び上る。主人の妹馳け込んで登場、目は大きく開いて驚愕の様子を示し、唇は痙攣し、手で何か言ひ現さうとするが言葉が出ない。)主人。どうした、どうした。

夫人。お冷やを。お冷やを持つておいで。

妹。いえ、聞いて下さい、たつた今悪い事が起つたのよ。きつとよ。私には分つてゐます。こんなに苦しいのですもの、急に私の心臓が止つてしまつたやうな心持がしたのですもの。悪い事が起つたのですわ。きつと何處かで、誰かが、私等の知つてゐる方が。

夫人。リイザさん、まあ氣を落付けるのよ。あなた氣味の悪い夢でも見たのでせう。

妹。(叫び)いいえ、本統よ、本統よ。(兄の腕に倒れる)

(幕)



#### 四幕目

舞臺二幕目に同じ。正午、晝食は取付けられ珈琲が並べてある。赤い襯衣の門番庭園の木柵をつくろつてゐる。新しく雇はれた女中テラスの傍に立ち門番の仕事を眺めてゐる。室内から主人の笑聲聞える。

女中。お前さんは何處から來てゐるの。

門番。レザン州からよ。

女中。あたしはカル州よ。

門番。まあどこからでも好いや。さうだらう。(女中をほればれと見る)

女中。お前さん何だか氣味が悪いわ。

門番。(作り笑ひをして色目で)どこが氣味が悪いね。この髭かい。之なら何でもないさ。實はおれはかかあに死なれて、後口を探してゐるんだ。

女中。(傍に近付いて)ねえ一體本統なの、買物に行つてると皆がさうしゃべつてゐただけど、ここの旦那は魔法使ひだつて。

門番。成程さうかも知れない。何でもお出來になる人達の寄合だからね。

女中。まあ怖い。どうりで皆さんが餘り親切過ぎると思つたわ、まるでどつちが御主人だか奉公人だか分らない位なもの。

門番。それからにせ金を拵へる人もゐるよ。

女中。へえ、さう。それから。

門番。まあそれ丈さ。あんな事してゐると西比利亞へ流されるぞ。



主人。(妹と共に部屋から現れる)それは好い、それは好い。ではお前牛乳をお上りよ。

妹。(顔をしかめ疲れたる様子)なぜ又あの人は赤い襯衣を着てゐるのでせうね。

主人。あれがお氣に召してゐるのさ。所でヘレナの話だが、あれで中々物の分つた利巧な女なんだよ。

妹。(匙で洋杯の中をかき廻し乍ら)さうですか。

主人。(テラアスの上をあちこちと歩み)さうだとも。おや、そこにゐるのが今度來た女中さんだね。お名は何とお言ひだい。

女中。(恐る恐る)私で御座いますか、ルケリアと。

主人。成程、ルケリアさんか、読み書きはやつたかね。

女中。いいえ。お祈りなら出ます。

主人。それから御亭主はお持ちかい。

女中。まだで御座います。まだ勝手な體で御座いますんで。

主人。田舎から來たばかりかね。

女中。へえ、もう木統の山だして御座いますよ。

主人。さうか。なにすぐ家の連中とも馴れてしまふよ、みんな氣さくなやつばかりだからね。中々呑氣な家なんだよ。

妹。(笑ひ乍ら)兄さんがいつでも面白い事をなさるんだわ。

主人。面白いつて。さうかも知れんて。ヘレナもそんな風に言つてゐたからな。とも角大體に於てお前の言葉には間違ひがないよ。實際我々と風俗の尺衆との間には廣い裂目が横たはつてゐる。その民衆を我々に近付



けるには、何事か起らずには済むまいて。姉さんは何でもこいつを巧く言つてゐたがなあ、一寸した言葉で良く精神を現してゐたが。全くおれは頑固だつたよ。精神と感情とに一の寶物が隠れてゐるのも氣が付かず、之を利用も知らなかつたのだから。おれの頭はどうしても鈍い、おまけに囚はれてゐる。

妹。それといふのも兄様が人間を尊敬なさらないからですわ。

主人。さういふ所もあるに違ひない。昨日お前をベットに連れて行つてから、おれは三時間ばかり姉さんと話してね、それから繪かきの先生を呼びにやつたが、そら、お前も知つてゐるやうにあの男は。いや、そんな事はおしやべりする必要がなかつた。

妹。どんな話でしたの。

主人。それなら話してみるか。あの繪かきは姉さんに惚れてゐるのだ。あいつめ自分の口からさう白狀してゐる。然しおれはそんな事を信じてはゐないし、ヘレナにしたつて同じさ。姉さんはあの男に對して賢い情深いおふくろのやうな態度で立派に話をしたのだ。その結果はみんな泣かすにはゐられなくなつたのだよ。ねえリイザ、人間がお互に理解し尊敬し合つてゐたら、どの位面白い生活が出来るだらう。己達三人も仲の好い友達に成るのだぜ。

妹。(辛辣に) 三人と仰つて、私は。

主人。お前は無論の事さ。リイザ、おれ達はみんな。友達に成るのだよ。そして同胞の爲に働くのだよ。それから同胞の爲に感情と思想の寶物を集めるのだ。その時に我々は人類の爲にどれ程重大な必要な事をしたか



といふ自覺が、誇りと共に胸に溢れてくる。それから心持の好い疲勞を覺え乍ら、この世と別れるのだ。この別れが缺くべからざる必然だといふ觀念に慰められ乍らね。おいリイザ、どんなに偉大なものだらう、どんなに曇りのない單純なものだらう、かういふ生活をしたならば。

妹。兄様がさう仰るのを伺つてゐると、本統に嬉う御座いますわ。私は兄様が大好き。何だかこの人生が今仰つたやうなさつぱりした美しいものに思へますわ。でもね、私一人で居りますと、尤もいつだつて一人ぼちで御座いますけれど。

主人。おいおい、悲觀しちやいけないぜ、そんな事は昨日のお前の空想さ。神經が悪くつてそこから湧いて來てゐるのさ。

妹。(憤然と)さう私の病氣々と仰つて下さいますな。もうそんな事は眞

平。どうぞ忘れさせて下さい。苦痛なんですから、本統にもう澤山ですわ、私だつて矢張り生きてう御座います。私だつて生きる權利を持つておりますもの。

主人。まあおこるのではないよ。(夫人登場)おやヘレナも來たね。ほんとに好い人だがひよいとすると暴れ出すヘレナさんが來たね。

夫人。何ですねえ、まあ。(妹に目配せする)

妹。(神經質らしく)姉さん、あなたは兄様を愛してゐらつしやるのでせう。

夫人。(まごついて)無論ですわ。

妹。まあそれで私も嬉しいわ。私にはまるでかう思へるのよ……。

夫人。私も一しきりは随分辛い目に會ひましたからね。めちやめちやな辛



さでしたわ。だつてこの人がその氣でなく知らずにゐて他人をひどく苦しい目に會はせるのですからね。

妹。(確信を以て)それは私にも出來ますわ。私は獸醫さんを愛しております。それでも昨日はあの人はいふ事を斷然と刎ね付けたのです。それでゐて夕方になるとあの人がお氣の毒になつて來て、何か恐ろしい事をあの人にしたといふ氣になつたのです。あの方は今の處誰よりも、ここにある皆さんよりも一番私の心に近い人です。さうして昨日の夕方は私はあの人を本統に愛してゐて、私には必要な人であると感じたのですの、あの人なしには私も生きてゐられない事を。

家主。(庭へ歩いて來て) 門番。

門番。(小聲に) 何で御座います。

妹。獸醫さんはそれは頑固者ですけど、人としては實に立派な者ですわ。

さうではなくて。

夫人。(妹をキスして) リイザさん、私はあなたの幸福をお祈りしてよ。私等だつて少しは幸福といふものも入用ですからね。

妹。まあ姉様の唇の熱いこと。

主人。おれもお前の幸ひを祈つておくよ。きつとその結果はお前の上に好い影響を與へるやうになるだらうからな。規律ある生活、之が一番重大な事だ。あの獸醫はおれにも氣に入つてゐる。精神上から比べてあの妹には格段の差があるからね。

家主。(叫ぶ) 門番、おいどうした。

門番。へえ、へえ。



妹。私今はすつかり気が落付けましたわ。私あの人と二人で何處かステツプの方へでも参りたいと思ひますの。あの人はステツプが氣に入つてゐるのですもの。二人ぎり、本統の二人ぎり、青草の繁つたステツプを通つてみたいわ。自由な目で四方を眺め乍ら。

家主。(家の一端に現れ)おい門番、おれはお前を呼んでゐたのに、聞えなかつたのかそれとも居なかつたのかい。

門番。お聲は確に伺つてゐましたよ、何か御用で。

家主。門を締めろよ、それから小さい入口の方もな。やあ之は且那樣で御座いましたか、御機嫌宜う御座います。

主人。いや之は。君、なぜ門を締めさせるのだい。

家主。まだ御存知御座いませんか。町の人間が大騒ぎ致しております、コ

レラが原因で御座いまして、あいつらの申分では、そんな厄病なんぞあつて堪るものか、唯醫者共が實驗の何のとぬかすので起つたのだとかう申しております。

主人。ばかめが。

家主。御尤で、御存知の通りの奴等で御座いますからな。がらくた共とは巧く申したもので、何でもかんでも愚にもつかぬ事を頭に押し込んでおりました、かう申しております、醫者は澤山ゐるが役に立つ奴は一人もゐやせん。と言つて愈々やつ等は……。兎も角ぶち壊しなんぞの参らない内に、門も入口も皆締めさせたので御座います。

主人。實にどうも相變らずばかな事をやるのはこつ。……  
家主。御尤で、へい、昨晚なども一人お醫者様……



まれたさうで御座います。

妹、お前さん、その人の名前を知つてゐますか。

家主。生憎存じませんで。

夫人。リイザさんは何を考へてゐるの、ポリスさんはお醫者ぢやなくつてよ。

妹。ええ、あの人はお醫者ぢやないんですけど。

夫人。少し歩きませうよ。(妹を部屋に導く)

家主。何か私の申上げた事でもお嬢様のお氣に障りましたかな。旦那様、獸醫の先生は旦那様ともうお話が済みましたんですか。

家主の倅。(家の一端に現れ)お父つあん、お役人様が來たよ。おや、これは旦那様。

主人。今日は。

家主。では御免下さいまし。(退場)

倅。好いお天氣ですな、暑くもなくて。

主人。全く氣持の好い日だ、今日は。

倅。一寸お伺ひしたいんですが、お宅のあの女中さんはもうお暇を頂戴したんで御座いますか。

主人。さうですよ。

倅。何だか金持の男へでも片付くと申しておりましたでせうか。

主人。さあそんな事はさつぱり知りませんね、僕なんぞが知る限りでもなし。

倅。あの女はお宅で正直に勤めましたんですか。



主人。勿論ですとも。唯ぞんさいでね。瀬戸物なんぞ随分壊しましたよ。悴。その御返事で少し参つた。ところで、私のおやぢは旦那様に化學工場の中で何か申上げは致しませんでしたか。

主人。(驚いて) 工場ですつて。へえ、どんな工場が立ちますな。

悴。實は私共が化學工場を建てまして、旦那様をその工場長に御採用したいといふ考へで。

主人。失禮だが、それは一體何のお話です。採用するのですつて。ばかばかしい。君は妙な言ひ方をする人ですね。

悴。決してこのお話は好い加減な事を申上げてゐるのでは御座いません。極く眞面目なお話でして、私共と申しましたのは、おやぢとこの私なので御座います。兩人共旦那様には十分敬意を表しておりますんで。

主人。(冷淡に) 感謝しますよ。

悴。手前共の財産は旦那様も御承知の通りで、それに旦那様もいづれは何か一定の職をお求めに成るだらうと存じておりますんで。然しこの勤めといふものは決して樂ぢや御座いませんでね、殊に旦那様などには餘程お辛い譯で御座いませう。

主人。成程そんな事かも知れませぬね。

悴。そこで私とおやぢとが旦那様の技術學問を尊敬して、殊に旦那様は會社などには至極適したお方とお見上げしておりますんで、そこでこの工場設立の見積をやつて頂きたいと、相談一決した次第なので御座います。主人。所がね、僕にはさういふ種類の見積は出來ないのですから。今迄ついでやつて見た事もないのです。第一僕は應用化學には何の興味もあり



ません。御親切は幾らでもお禮を言ひますがね。

悴。へえ、技術といふ方面はお嫌ひでして。

主人。その通りですよ。詰らないものですからなあ。僕には向きません。

悴。(主人に同情するらしく見つめて)真面目でさう仰るのですか。

主人。真面目どころぢやありません。

悴。そいつは残念で御座います。然し兎も角私共もかう考へておるので御座いますから、且那樣にも一つ御勘考を願ひまして。では御免下さいまし。

主人。(部屋から登場、激した様子)あなた。

主人。何だね。

主人。リイサさんはもう本統に病氣が悪いのよ。

主人。一度發作があるとなあにいつもあの通りだよ。大した事はないのだから。今そらあの小僧の、家主の悴さ、あいつと議論をやつたんだ。酷い奴ぢやないか、お前だから言つてみるが、小僧め、おれに大層同情のある口振なんだ。そのやり口の卑しいと言つたら。このおれに何とやらの見積を作つてくれとぬかしおる。

夫人。何でもあなたをこき使つて、金を作る道具にしようといふ腹なんですよ。私その計畫とやら聞いて知つておりますわ、あの家主のぢいさん私と一度その事で話をした事が御座いますの。あなたどうかなすつたの。お寒かないの。

主人。なあに。ちつとも。

夫人。なぜそんなオオバアシユウスを穿いてゐらつしやるの。



主人。(足を見て)成程いつ穿いたらう、之は不思議だ、知らない間に。

夫人。きつと新しい女中がお付け申しておいて、あなたがお氣付きなかつたのでせう。

主人。さうだわい。もうあの女中はおれの部屋に寄せつけてくれるな。又あの女中もおれをいらいらさせる。酷い亂暴者だからな。手當り次第に物を壊したり、又何かべたべた塗るんだらう。今朝も見ると過酸化水素で頭を洗つてつゐる始末だ。きつとオオ、ド、コロンとでも思つたんだらう。(夫人の手を握り)ヘレナ、お前昨日は随分おれをひどい目に會はしたなあ。

夫人。ほんの二三分でしたわ。その代り私などは幾月となく幾年となく苦んで参りましたからね。

主人。もうそんな事は言はないでくれ。もう用はない、用はない。

夫人。あなたは他人が心から愛しても、何の反應もない時は、どんなに張合のないものか御存知ないのね。あなたは私を乞食になさいました、ほんのちよいと目を掛けて頂いたり、少しばかり優しい言葉を待つてゐる乞食ですね。そんなお情を待つてゐる事はどんなに辛いものでせう。あなたの精神はそれはお立派でああなたのお頭はいつも偉大な事ばかり考へてゐらしつても、その偉大なるものの中の最高の人間といふものはちつともお考へになりませんのね。

主人。もうそんな事は過ぎ去つた事だ。今は話が違ふよ、唯あの繪かき丈は可哀想だなあ。おや門の鈴の音がする。さうか、門を締めたのか。きつと畫家かも知れないぞ、どうぞ獸醫の先生であつて欲しいな、妹の事



かなんかで。

夫人。(憎々くしげに) リイザさんの事ですつて。

主人。ヘレナ、お前はおれがやきもちを焼いてゐるとは考へちやゐないだらうね。

夫人。(威嚴を以て) 勿論ですとも。あなたには學問の外には。

主人。ではお前おれに撲つて貰つた方が好いのかい。(とキスしやうとする。庭に寡婦のくるのを見てどきまぎして) おや、そら、そこだ。お前の肩の上に羽根が載つてゐるぢやないか。

寡婦。(狼狽した笑ひ方で) 御機嫌よう。

主人。(誇張して誇しさうに) やあメラニイさん、随分酷いお見限りでしたね。

寡婦。ちつとも御無沙汰してはおりませんよ。昨日だつてお邪魔しました

わ。あなたはもうお忘れなのね。

主人。ああさうでしたつけ。思ひ出しました。

寡婦。昨日お尋ねしたのにそんな事仰つておからかひ遊ばすのだと存じましたわ。

主人。(あはてて) そんな事あるものですか、ばかな。(氣を取直して) 誰でもよくそんな間違ひをするぢやありませんか。

夫人。あなたは黙つてゐらしつた方が好さそうね。

寡婦。(愛情を籠め、しかも悲しさうに) まあ。

主人。どうもその方が好ささうだな。先づ行つてオオバアシユウスを脱いでこやう。何の爲に之を穿くのかあのばか鳥め、それも知りやせん。(退



場

寡婦。(悲げな微笑) すぐ何でもばかな事を、つて仰るのですからね。私はあの方に心の底までお打明けした譯なんです、それをどうでせう、そんな事は誰にもよくあるつて、それつきりですからね、まるで私があの方の足の魚の目でも踏んだやうなお仕打ですわ。

夫人。あなた悪くおとりに成つてはいけませんわ。

寡婦。(率直に) いいえ、どうしてそんな悪くなんぞ思ふのですか。私は夜通し部屋の中を歩き續けて考へましたよ、どうしたらあの方とかう大膽にお話が出来やうかしらつて。そこで結局私はまづこんな風に考へましたのよ。お前のお金であの方を誘へばいい、誰としても金には目が眩むものだ、とかう思ひましたの。ところがあの方はそんな事ではびくと

もなさりませんでしたわ。

夫人。あなたももうそんな事は忘れてお了ひなさいまし。(主人の妹靜に登場) リイザさん、どうおしなの。

妹。(悲しさうに) あのポリスさんはお見えにならなくて。

夫人。いいえ。まだよ。

妹。まだなの。(退場)

寡婦。リイザさんは御挨拶もして下さらないのね。お顔が眞蒼だわ。

夫人。昨日又發作が起りましたの。

寡婦。また。お氣の毒ね。あなたは私に忘れてお了ひつて仰つたわね。でも私は忘れません。いいえ、忘れてはすまないわ。奥様、私はまあ何と申してよいあばずれでせう。無遠慮で、墮落してゐて、思想といふもの



は貧弱で、持つてゐる考へもみんな眞直なものではなく、まるで蛆虫のやうにあつちこつちと這ひ廻つてゐるのですもの。私はこんな考へをもつ持つてゐるやうとは思ひません。もう澤山で御座います。私はもう之から上品に成りたる御座います。上品になりたいといふ欲が出て参りました。此儘でゐれば取返しのない體になりますわ。

夫人。さういふお心掛けなら譯はありませんわ。あなたも今迄辛い目にばかり會つておいでなすつたんですからね、今は體を休めて昔を忘れてしまはなければいけませんわ。

寡婦。全く苦しい日ばかりでしたからね、神様はそれを御存知です。私は散々に打ちのめされました。けど體がぶたれても頬がぶたれても、決して痛いと思つた事はありません、唯この心丈は、この心丈は苛まれ傷

けられて、善を信じるのさへ難くなつたのです。善を信じる事の出来ない生活がまあ何の意味が御座いませう。例へて申せばボリスさんで御座いますね、あの方は一切を茶化してしまつて何一つ信用なさらないのですからね、その結果はどうで御座いませう、まるで宿無し犬のやうにうろつき廻る丈ですもの。あなたは私をすぐ信じて下さいました。私は随分びつくりしたので御座いますよ。それで之はきつと私をお瞞しになるのだと存じました。その代りにあなたは私にそれはお優しくつて、私の目を開けて下すつたので御座いますわね。

夫人。もう好いことよ。そんなお話はおしまひにしませう。

寡婦。あなたは親切に譯もなく私の目を開けて下すつたので御座いますね。私が旦那様をお慕ひしたのは、決して私の心の中の心がしたのではなく、



心の中の人間がしたので御座います。その人間といふ心持も昔はそんなものも分らず又信じてゐなかつたのですからね。

夫人。それがお分りになれば私も嬉しう御座んすわ。

寡婦。私にはすぐ理解が出来ましたの。けれども又かうも考へましてね、まあ一度試験してみるがいい、きつと立派な男を夫に買へるだらうつて。本統に私下等な女でせう。

夫人。さう餘り自分の事ばかり仰らないで、もつと自尊心を持たなければいけませんわ。自尊心が無ければ生きてはゆけませんもの。私何でもあなたのお役に立つ事をして上げたいのよ。

寡婦。あら、どうぞね。どうぞ基督の爲にこの金を持つた商人の家内に小さい贈物をなすつて下さいませ。

夫人。そんなに仰らないで、まあそんなにお泣きになつてはいやですわ。

寡婦。どうぞ私の心を涙で洗はして下さいまし。どうぞ私の體を守つて下さいまし、私にも善い事や高尚な事を教へて下さいましな。あなたはお利巧で何でもお出来なんですもの。(主人の妹登場) あらリイザさん、御機嫌よう。

妹。(黙つて寡婦に手を差出す) あの方まだお見えにならなくて。

夫人。まだよ。どうかしたの。

妹。いいえ。

夫人。工合が悪いのぢやなくて。

妹。そんな事は。でも私心配で。(庭の方へ行く)

寡婦。どなたを待つてゐらつしやるの。



夫人。あなたのお兄様のボリスさんよ。あなた御存知でせう、リイザさんは夫婦約束をしたのよ。

寡婦。あらまあ、それでは私もパウルさんと御親類に成る譯ね、それからあなたとも。まあ兄がリイザさんと戀をして。私一寸リイザさんの所に行つて参りますわ。よろしくつて。

夫人。行つてゐらつしやいとも。

寡婦。(元氣付いて嬉しさうに) 好いお話を伺つたこと。どうぞ一度お體を抱かして頂戴。(乳母登場) お庭にゐらつしやるからリイザさんの所参りますわ。おやおばさん、今日は。(退場)

乳母。これはこれは。なぜ又あの女中はテエブルの上を片付けないのだらう。奥様、あなたはたあんな女中を口入からお呼びになりましたが、かう

いふ者は御自分で探して、口入なんぞに任しておいてはいけませんのよ。夫人。(乳母の肩へ手をやり) そんなにぶつぶつお言ひでないよ、勿體ないやうなお天氣ぢやないの。

乳母。春になれば毎日暖なお天氣で御座いますよ。だから物の始末をしないで好い事は御座いません。あの女は二三日前に入れておいたお茶を飲んでしまつて、すつかりサモワルを空にして了つたので御座いますもの、まるで馬みたいな。(畫家登場)

夫人。でもお前さんが生水を飲んではいけないと言つたからよ。

乳母。水はよいと申しました。所が奥様、あの女は燕か何かの積りでお砂糖を嘗めるので御座いますもの。(食卓上のものを運び室内に退く)  
夫人。(畫家に) 之はゐらつしやいまし。



畫家。(激した様子) お手をキスしてはいけませんか。

夫人。なぜそんな。

畫家。(嘆息して) いえ、いけないかと又思ひましたんで。

夫人。大層な溜息をなさるのね。

畫家。あなたのお顔を拜見すると、僕がどんな事を考へると思召す。

夫人。それは面白いわね。さあ何でせう。

畫家。あなたは僕をだしに使つてパウエル君の氣を休めて、あなたに親切な

注意心を集中させるやうにしたんですね。中々見上げたお手際でしたよ。

夫人。まあ何といふ物の仰りつ方でせう、僕をだしに使つたつて。それは

どういふ意味でせう、それから見上げたお手際だなんて。

畫家。(辛辣に)奥さんは僕に小學校の生徒のやうに學問を教へて下さいま

したね。

夫人。(眞面目に)あなた、私は餘りばかなお話は伺ひたく御座いませんよ。

畫家。(物を案ずるらしく、率直に)僕は随分氣の利いた役廻りだったので

すね。それがしやくに觸るのです。兎も角僕は妙な氣分になつてゐます。

昨日のお話以來僕の頭はめちやめちやに成つてゐます。奥さん、どうぞ、

本統の事を聞かして下さい。

夫人。改めてさうお尋ねなさらなければいけないので御座いますか。

畫家。僕はお尋ねしたいのですが、あなたは僕といふ者に對して一度も温

い心持をお持ちになつた事はありませんでしたか。

夫人。男としてのあなたには一度もさう感じませんでしたわ。人間として

のあなたなら私は眞面目に心の底からお慕ひ致しました。



畫家。(微笑し乍ら)それがお世辭といふものですかね。僕には人間なんて仰つても分りません。僕はあなたを愛してゐるのです。そんな人間の何のといふ區別なんぞありやしません。僕は昨日になつて初めて女の中には所謂女性といふものと人間性といふものが密接に融合して、唯一になつて離るべからざる美しい調和した姿になつてゐるのを感じたのです。僕はそれで恥づかしくなつて自分に同情しました。それで僕は昨日からあなたをお慕ひ申してゐるのです。

夫人。(不機嫌に)又なぜ今更らしく。

畫家。(眞面目に力を入れて)僕はあなたをラヴしてゐます。この生涯をかけてラヴします。僕はあなたから何も要求はしません。恐く僕も世間並に嫁も貰ひませう。併し愛する人はあなた丈です。永久にあなた丈です。

ああもうこんな話もやめませう。随分御迷惑でしたねえ。さうでせう。夫人。(男の手を握り)私にはあなたが眞理を仰つたやうに思へますわ。畫家。してみると今迄は僕の言葉に一度たりとも眞理がなかつたといふ譯ですわね。

夫人。(優しく笑ひ)いえ、さうではありませんわ。譯を申しませう、私が一度自暴自棄に成つた事が御座いませう、その時私はあなたにおすがりして、淋しいこの心をお訴へしましたらう、あなたはその時それは立派な純潔な態度をなさいましたわね。私はあの時強い温い感謝の心持を持つてゐたので御座いますよ。するとその後になつて、あなたは私を愛すると仰つり初めたんでせう。

畫家。(物を案するらしく)漸くその時ですか。ではあなたに御迷惑だつた



といふのですね。

夫人。(笑ひ乍ら) さあ。少しばかりはね。

畫家。(激して悲しそうな様子) もつと穩に言ふ丈の才が僕には無かつたのです。僕はばかです。僕には人間が分りません。

夫人。もうそのお話はやめませう。そして二人で仲の好いお友達に成りませうよ。

畫家。(微笑して) 誓ひませうか。

夫人。(男の頭を抱き額にキスして) あなたどうぞ自由な生活をして下さいよ。藝術家には精神や才能と同じやうに自由が必要なんですからね。それから偽りのない生活をして下さい、又餘り女を悪者に思はないで下さい。

い。

畫家。(感動の心持を抑へて) 奥さん、その最後のお言葉は仰つる必要がないでせう。まあ私はお禮を申し上げます。あなたの仰つる通りです。藝術家家は孤獨であるべきものです。自由とは孤獨の事ではないのでせうか。夫人。きつとさうでせうね。

畫家。おや御主人がくるな、おかしな足どりが聞えるから。(主人登場) やあ。主人。メラニイさんはお歸りかね。

夫人。リイザさんとお庭ですわ。お呼びませうか。

主人。冗談するなよ。それより今度來た女中の方を氣を付けるが好い。危く石鹼を喰べてしまふ所だつたよ。紙に包んだ石鹼をあけてくれるやうに頼んだら、あの女めその包紙を少し破いて、石鹼を隠しに押し込んで、後で嘗めてゐるぢやないか。



夫人。まあ飛んでもない。(部屋に入る)

畫家。なめさせておくさ。好きな事はさせておくに限る。僕は丁度奥さんに新しいラヴの宣言をしたんたぜ。

主人。(稍不安の様子)おやさうかね。僕は君が旅行に出る方が好いと思ふね、さうすれば何もかもさつぱりするぜ。つまらない事は氣に懸けないで。

畫家。僕も出かけるよ、さつぱりしないとは分つてゐてもね。まあさう心配したものでもない。

主人。僕は別に心配してもゐないが。唯少し不愉快丈なんだ。

畫家。幸福でゐて不快愉なのかね。それなら寧ろ名譽ぢやないか、いくら氣持は悪くても。

主人。さう無暗に突かかるなよ。ヘレナが悪くつても僕には罪がないんだ。

あの女が僕を愛して君を見返つたとしたつて、僕には手の出しやうも無いぢやないか。

畫家。(微笑して)頼もしい御亭主だなあ。

主人。君だつて昨日は僕をうんと酷い目に會はたしからね。何にして君は僕よりも仕合せだ。僕なんぞはいはば世に知られてない軌道の上の一遊星に過ぎない。自分でころがつてどこかしらへ飛んでゆくんだ。所が君は太陽の周圍を廻つてゆく。君は太陽系と調和してころがつてゆくのだ。

(主人の妹庭に現れる。その後、夫人は室内か登場)

畫家。僕がどんな風にころがつてゐるのか知らないが、僕は忠告しておくよ、君は奥さんの周圍をころがり給へ、目から離しちやだめだぜ。



主人。みんな君達は親切だね。

妹。(悲歎の様子) まだなんでせうか。

夫人。ええ、では呼びにやりませうか。

妹。いいえ、それには。(室内に退場)

寡婦。(小聲に心配さうに) あのね、リイザさんは獨言ばかり仰つてなのよ。

始終ステツプだの砂漠だのつて事ばかり口に出して。

妹。(部屋から) メラニイさん、どこなの。

寡婦。(急いで退場) 今行つてよ、今行つてよ。

夫人。あなた、私本統に氣に掛るわ。どうしてもお醫者様に見せなくては。

主人。よしよし、おれが呼んでくる。

乳母。(登場) ワギンさん、茲にお手紙が。

畫家。へえ、どこから。

乳母。お宅からで御い座ますよ、すぐお渡ししてくれと申すことで。(退場)

畫家。どうしたんだらう。(封筒を開いて讀む。激動する) 大變だ。あの獸

醫が。聞き給ひ。

夫人。どうぞお小さい聲でね、妹に聞えないやうに。一體どうしたんで御座いますの。

畫家。昨日ここを出てゆく時は、冗談まじりで笑つたりして、今は此通りだ。(讀む。思はず獸醫の聲色となる) 『君まだここにアネクドオトが一つある。首をくくつた獸醫の話だ。この男もあの英吉利人のやうに地位の名譽を護らうと思つた。君にあの目の上の皺のお禮をいふよ。少くともある男の皺が残つてゐる事は愉快だ。ネクタイの色合はよつほど注意



し給へ、重大な問題だからね、チエブルノイより」  
主人。悪戯ぢやないかね。

夫人。どうぞお小さい聲でね。何のアネクドオトでしたの。どういふ事なん  
でせう、何か洒落ちやないんでせうか。

書家。いやいや。あいつは笑つてゐましたがね。ああしまつた事になつた  
わい。

妹。(急いで現れ一同を眺めて)もうお出でになりましたか、何處にゐらつ  
しやるの。

夫人。まだお見えにならないのよ。

妹。でもお聲がしたわ。あの方のお聲が。あの方のたつた今お話しするの  
が聞えたわ。どうしてそんなに黙つてゐらつしやるの。あの方何懇なん

でせう。

書家。それは僕でしたよ、しやべつたのは。

妹。いいえ、あの方のお聲でしたわ。

書家。僕があの方の男の聲色を使つて冗談をやつたんですよ。

妹。なぜで御座いますの。

書家。さあそれは。

主人。皆でばか話をしてゐたのさ。するとそこへ。

妹。そこへと申しますと。

夫人。まあ落付いて下さいよ。

書家。僕があの方の男のしやべる癖を知つてゐるので、聲色を使つて二言三言  
しやべつたのですよ。



妹。まあさう。あなた本統を仰るの。でもなぜ皆さんさう黙つてゐらつしやるの。兄様、どうかしましたの。何かあるのよ。兄様は嘘を仰らないのね。さうでせう、どうしたのよ。

畫家。(こつそり室内に入る)

主人。何でもないよ、實は。いや今言つた通りさ、ワギン君がしやべつたんだ。

夫人。リイザさん、よく聞いてゐらつしやいよ。

妹。姉様、私に觸つてはいや。兄様、私にすつかり話して下さいませ。

主人。ところがおれはさつぱり知らないのだ。

妹。どうかしたんですね。姉様、どうぞすぐあの人の所へ使をやつて下さいませ、どうぞすぐにやつて下さいませ。

夫人。ええ、すぐやりますから氣を落付けてね。

妹。皆さんは嘘つきね。ワギンさんは何處にゐますの。あの方妹さんと話してゐらつしやる。妹さんがあんな顔をして、あの顔は。

主人。(夫人に小聲で) どうしたら好いだらう。

夫人。(小聲で) お醫者様をすぐに。

妹。ああ倒れさうだわ、姉様助けて頂戴、倒れさうだわ、何をそこでこそこそ言つてゐるのよ。

夫人。どうしたらあなたの氣が落付くんでせう。パウル。

妹。兄様はどこへ馳けてゐらつしやるの。姉様、どうぞ私の目をじつと見てゐて下さい。お願いですから嘘を言はないで頂戴。(寡婦室内から現れその後、畫家。)どこへゐらつしやるの、あなたのお兄様は何處なのよ。



寡婦。さあ。

妹。どうぞ聞かして下さい、早く早く。もしやおなくなりになつたのでは。寡婦。存じませんわ、存じませんわ。(門の方へ行く)

妹。あらあら、何とか返事をして下さいまし。ああ胸が裂けさう。もしもボリスさんが死んだとすれば、私が殺したんだわ。おおそんな事があつては。

畫家。途方もない事を。

女中。(テラアスから馳けて登場、嬉しい事でもあるやうに元氣よく) 皆さん、皆さん、御存知ですか、獸醫の先生が。

畫家。(拳で脅し) 黙れ。

女中。首をくくつて。

妹。(夫人の腕から身を脱し靜に明瞭に) 昨夜の九時頃ではなかつたの。

女中。ええ、さうで御座います。流れの傍のはこ柳の木で。私お嬢様は御存知ないと思つておりました。(退場)

妹。(目を大きく開き一同を見廻し小聲で特有の調子) 私知つておりましたわ。姉様、そうれ御覽なさい、私ちやんとさう感じておりましたわ。(聲をひそめ驚いたやうに) いいえ、私ではなかつた。あの方を殺したのは私ではありませんわね。(叫び) ああどうして殺さうと思ふものか。(倒れんとして畫家と夫人と之を支へ室内に運ぶ。妹は叫びわめき周圍を打叩き絶えず口早に叫ぶ) いやよ、いやよ、いやよ。(テラアスの隅から門番がのろい歩き方で現れ室内を覗く)

女中。(室から走り出で驚いた様子) ねえ、お前さん、何といふ名なの。レ



ザ、から来たんだつてね。一體皆さんあすこで何してるんだらう。  
門番。何をね。

女中。だつて皆さんがお嬢さんを引張つて行くと、いやよいやつていふのはあれはお嬢さんなんだよ。

門番。さつきからのがさうかい。

女中。ああ、みんなで無理に連れてつたの。私怖くて。

門番。(仔細らしく)さて何かね、あのわめき聲は。

女中。分らないのよ。皆さんのあの騒ぎ方はまあ。

門番。わめかなくつてもよささうだに。誰も頼みもしねえになあ。

家主の悴。(隅から急ぎ現れ)あの大聲は誰かい。

門番。(頭で女中の方を示し)ありやこの先生の。

女中。(目配せし乍ら)私ぢやないことよ。私の内の皆さんよ。

悴。(女中に向ひ險しく)誰なんだよ、大聲出したのは。

女中。お嬢様だわ。

悴。(目で試すやうに)なぜ又。

女中。皆さんが引ずつて行つたもんだから。

悴。誰が。

女中。あすこにゐる皆さんがよ。

悴。(女中の肩を叩き)そんなばかな事が。(テラアスへ出る。出會頭に乳

母。)騒ぎは一體何です。

乳母。お嬢様が發作をお起したんでね。

悴。(門番と女中に。門番は庭の垣根に近付き又そこで修繕を初める)ばか



が二人で。ばあやさん、抑もどうしてそんな事になつたんです。

乳母。みんな神様の思召ですよ。みんなあの男の罪さ。

悴。(嘲笑するやうな笑ひ方) やつぱりあの獣醫のせいですな。(満足さうに退場)

乳母。(憎々しげに見送り、嘆息して、悲歎の調子で) ばか、そこで何をしてるんだい、さつさと内へお入り。

女中。ばあやさん發作つて何。癲癇なの。それとも違つて。

乳母。ああさうだ。さうだ。いいからお入り。

女中。(退場)癲癇なら珍しくもないわ。私はもつと外のを見た事があるわ。でもお嬢様が引られてゆく時は私ほんとに怖かつたわ。(門番何やらぶつぶつと一人でこぼしてゐる。書家部屋から機嫌悪るさうに出て来て、

テラアスの上をあちこちと歩む。門番に目をつける。スケッチブックと鉛筆を取出す)

書家。おちさん。

門番。手前で御座いますか。

書家。一寸立つてくれまいか。

門番。へえ、何御用で。

書家。(スケッチし乍ら) いやさ、寫生したいんだ。

門番。何で御座いますつて。何か悪い事にでもなりや致しませんか。

書家。二十コペク上げるよ。

門番。こいつはしめた。

書家。頭をもう少し上げて。



門番。(頭を高く上げ)この位で。

畫家。もうちつと低くさ。そんなに高くつちや。

門番。之でもお目にとまる所が御座いましたか。もつと好い恰好致しませうか。

畫家。(齒の間から)なあに申分ないよ。(間。室内から呻き聲する。町の離れた方から騒しい物音がする。寡婦登場)

畫家。どうしたんでせう。

寡婦。(暗鬱に)私兄を見て参りましたの。それは怖ろしいので御座いますよ、眞蒼で、舌を垂らして、何だか人を莫迦にして笑つてゐるやうなんですよ。本統にいやな。あのリイザさんはどうしました。

畫家。(沈んだ調子で)そら、聞えるでせう。

寡婦。どうしてこんな事に成つたのでせう。まだ治らないのですか。

畫家。初りはどうしたんです。

寡婦。私存じませんわ。私には何が何やらさつぱり分りませんの。唯怖いばかりで。あなたはこの最中にスケッチなのね。よくそんな事がお出来になりますね。

畫家。然しあなたは呼吸をしてゐらつしやるでせう。あなたその呼吸が止めてみせられますか。おぢいさん、もう好い、二十コペクここにあるよ。(門番の前に錢を投げる)

寡婦。奥さんはあすこにお一人なの。私お傍に行きますわ。きつと御用がおありだから。兄も早くお葬式をしてやらなければ。私まだ何にも手が着けてないのですよ。唯一寸死骸を見てすぐここに参りましたの。何だ



か往來では大勢わいわいやつてゐますのね。あつちこつち馳け廻つて何だかおこつてゐるやうよ。私には分りませんわ。唯兄のあの眞蒼な顔がちらついて、それにあの舌がだらりと。ああまだあの顔が笑つてゐるわ。  
(泣き乍ら室内に入る。)

門番。(満足らしく) 旦那、御新造さんが泣いてどうかありませんか。  
か。

畫家。あの人の兄さんが死んだんだよ。

門番。ははあ、成程、それでよめた。尤も女といふ奴は譯もなくめそめそやるもんで。ちよいと襟首をかすつた丈でもう仰山にほさきますからな。  
(町の騷擾次第に高くなる。暗鬱な叫び聞える。家主の悴舞臺の後にて「もんばん」と呼ぶ驚愕の聲する) 待つてゐなせえ。(耳を澄ます。) きつと

と火事だな。でなければ喧嘩か。それともこいつ泥棒だな。厄介な泥棒だ。どれ一つ行つて見て來ませう。

夫人。(登場。畫家問ひたげに見る。頗る激動の様子) リイザさんとても治りませんのよ。

畫家。だつて今更初つた事でもないでせう。

夫人。けれど今日のはついぞ今迄に見なかつた位ですもの、もうまるで氣違ひのやうになつて、初めは毒を飲まうとするのですもの、それから不思議にぱつたり靜になつたのですよ。唯目が獸の目のやうにきらきら光つて。

畫家。奥様、おひやでも差上げませうか。

夫人。いえ別に。さうかと思ふとごろりと横になつて、この私が氣を苛々



させるのだといふのですよ。私が次の部屋に居りますとね、急に靜に靜に立上つて、宅のテエブルの所へ参りますの、その引出しにはピストルが入つてゐるので御座いませう。唯今は茲に持つておりますけど。私リイザと取組みましてね、するとまるで獸のやうに私の手を引掻くのですよ、まるで獸でしたわ。

畫家。途方もない事だ、なぜ又僕をお呼びにならなかつたのです、早く來てくれとか何とか。

夫人。あの時二人の内で誰も引金をひかなかつたのが不思議ですね。今はもう體を縛つて横に寝かしてありますの、女中の手を借りて致しました。ばあやがこの有様を見て泣いて、リイザにこんな事しては勿體ない、總督様のお嬢様だとばかり申しております騒ぎで。何といふ騒ぎなんでせ

う、大層大勢人の聲が致しますわ、きつと近所で御座いますね。

畫家。門番が様子を見に参りましたよ。

夫人。パウルはまだ戻つて参りませんのね。おや、何でせう。(邸の門前に騒ぎ起る。「あいつを捉へろ」「やい、やい」「垣根を飛び起せ」「そら小僧を捉へろ」「ステッキを持つてゐる奴だ」「捉へろ」などと呼び聲する)

夫人。(驚いて) 何でせう、逃げませう。

畫家。僕はひとりで。(家の隅の後から醫師突き入る。服は裂け帽子も無く、テラアスに上る)

醫師。どうぞ僕をかくまつて下さい。門をしめて下さい。

夫人。先生、どうなさいましたの。

醫師。ぶちこはしです。もう病院をぶち壊しました。僕は門の後で捉へら



れて、散々ぶたれて来たのです。(畫家入口に突進する)

夫人。(畫家に)あなたピストルを持つてゐらつしやい。

醫師。あいつらが人つて来て僕を。

夫人。(醫師を家に導き)さあゐらつしやい、早く早く。ばあや、ばあや。(門は酷く揺すぶられ觀音開きの扉の板は破壊され、硝子はめちやめちやになる。主人飛び込んでくる。その後から十人ばかり追ひ来る。それを防禦して帽子やはんけちを投げ付ける。それが可笑しくて群衆中笑ひ出す者あり)

主人。貴様達、出ていつてくれ。

群衆中の甲。貴様はおれの口にその檻褌を。

乙。おい君、その帽子で一つくらはせろ。

丙。(憎々しく)今ひどい悪口を教へてやるぞ、

乙。籤醫者は何處へ行つた、あいつを探せ探せ。

丙。こいつもやつぱり醫者だぞ。捉へろ、捉へろ。

畫家。(隅で)門番、入口を締めろ、こいつらを逐ひ出せ。

主人。ぶてるものならぶつてみる。

畫家。君、君、待ち給へ、僕がみんな逐ひ出してやるから。

錠前屋。(トロシンと共に現る。錠前屋は少し酔つてゐる。トロシンはべろべろである。主人に飛び付き門の方へ押しつける)やい、この野郎、とらうとら捉へたぞ。

主人。(突返して)無暗な事するな。

錠前屋。おいみんな、こいつが悪黨の親玉だ。こいつがああ薬を拵へるん



だ。

主人。嘘をつけ。おれが何をした。助けてくれ。

群衆から。もうと大きな聲で言はないと聞えないぞ。

夫人。(テラアスに現れ、錠前屋の様子を見てピストルを持ち主人に近付く) エゴル、離さないかい行つておしまひ。

主人。ヘレナ、ヘレナ。

錠前屋。コレラに罹つたらみんな死ぬんだと言ひやがつたのを覚えてゐるか。それから。

夫人。之で打つてしまふよ。(夫人の現れたのを見て群衆から種々の叫び起る「あの女を見る」「何だ飛び廻つて」「ピストルなんか持ちやがつて」「打つたら打たせろ」、こん畜生め)

錠前屋。奥様、わしやかかあに死なれましたぜ。

夫人。打つよ。

錠前屋。ここでお前さんもやもめになるんだ、おれが御亭主の首をひねりや。

夫人發砲する。その前から門番は錠前屋を取巻いた群衆中に紛れ込んでゐたが、手に破れ板の木片を持ち、落付いた様子でそれを振上げ、群衆の頭をなぐりつける。その様子が一語も口に出さず極めて要領よく憤怒の様子も見せない。夫人が錠前屋に發砲した瞬間に門番飛びかかる。錠前屋呻き乍ら主人を地面に引き倒す。夫人は群衆の方へ進んでピストルで脅す。残らず發射し盡すと群衆の中に烈しい動搖起る。一同驚き叫ぶ「あの女打つたぜ」「見ろ、仆れてゐる」「あん畜生め」。庭



から一人の男馳け來り大聲で叫ぶ「何だ、そんな事でびつくりする  
とはないぢやねえか、高が女だ」。群衆逃げ去る。

夫人。(夢中で) 行つておしまひ。打つよ。ワギンさん、もんばん。旦那を  
助けて上げて下さいよ。さあ出てゆけ。(門番トロシンに飛びかかる。ト  
ロシンは錠前屋の傍で地面にうづくまり何か呻つてゐる。門番が板で打  
つてかかると、わめいて仆れて了ふ。隅から畫家現る。服なぞめちやめ  
ちやになつて、門番の勇敢な働きを眺める)

畫家。(手に煉瓦を持つて) 何をしてるんだ、そこで。

門番。何で御座います。

畫家。奥さん、御主人は何處です。(門番木片を投げ捨て主人の傍に膝まづ  
く)

夫人。(我に返り) あ、仆れてゐる。(叫んで) あなたがぶつたんでせう、  
畫家。そんなことが。

寡婦。(夫人の叫びを聞き馳けつけて) どなたが殺されたの、嘘でせう。

夫人。(ピストルを錠前屋に向け) こいつがしたのだ。私はこいつを。

畫家。(ピストルを叩き落し) 何なさるんです。しつかりなさい。

寡婦。(主人の傍に寄り) まだ生きてゐらつしやるわ。

夫人。おひやを、おひやを持つて來て下さい。

畫家。(寡婦に) あなた。行つて水を持つて來て下さい、奥さん、氣を落付  
けるのですよ。(寡婦室内に走り入る)

門番。何だ、みんな生きてけつかる。動いてゐるぢやねえか、氣違ひのや  
うに成つてぶちのめしてやつて、それでもまだくたばらねえ。(畫家と夫



人とは主人を抱き起す、主人は氣を失つてゐる。門番はトロシンを揺り起す。

夫人。(驚いて) あなた、あなた。

畫家。なあに氣が遠 なつた丈ですよ。

門番。(トロシンに) さあ立つた、立つた、ふざけた眞似はよせよ、起きねえと又おまけを食らはせるぞ。

乳母。(馳け寄り) 旦那様は、旦那様は何處で御座います。

畫家。そんな大きな聲でなく。ばあやさん。

主人。(まだはつきりとはせず) ヘレナ、おお前か、みんなもう逃げてしまつたか。

乳母。あいつらにおぶたれになつたんだ。(夫人に) あなたは旦那様のお加

勢をなさらなかつたんですか。

夫人。(主人に) お苦しい御座いますか、どこぞお痛う御座いますか。(錠前

屋正氣にかへる。頭を上げてうなる。)

乳母。旦那様を起してお連れ申ませうよ。

寡婦。(水を持ち來り) お氣がおつきになりました。あら嬉しい。さあおひやをお上りなさいまし。

夫人。何處ぞお痛う御座いますか。酷くおぶたれに成つたんでせう。

主人。おれは、おれはちつとも痛い事はない。あいつがおれの頸を締めやがつたんだ。そらその。(正氣に復し) ヘレナ、お前はどうもしなかつたかい。おれは又お前が頭をなぐられてゐた様な氣がしてゐたんだ。板  
○きれで、頭からかう。



夫人。いいえ、ぶたれなんぞ致しませんわ。どうぞ氣を落付けて下さいまし。

畫家。君、随分やられたかい。

主人。なあに、大した事はない。どういふ譯かみんながおれの腹の上を踏みつけやがつたんだ。畜生め。醫者はどうした、大丈夫か。

寡婦。御無事でゐらつしやいますよ。お客間のソファの上に横に成つてゐらつしやいます。さうして泣いて。

夫人。(乳母に、不安さうに)ばあやは、それからリイザさんは。

乳母。私リイザさんの縛つてあるのをお解き申しましたよ、とても見てはゐられません。

夫人。どこに。

乳母。(泣き乍ら)お部屋で御座います。お召物がびりびりになつてゐるので着替へて差上げました。

畫家。何をしてゐますね。

乳母。お寫眞を御覽になつてゐらつしやるのですよ、あの方のお寫眞を。

夫人。ばあや、お前はリイザさんの所に行つてゐておくれ。願ひだから。

乳母。旦那様をお床にお連れ申したいので御座いますが。(退場、主人の方を見廻し乍ら)

主人。何おれはどうもしてやしないよ。ほんのびつくりした丈だ。

寡婦。まああなたは。(錠前屋、トロシン、門番一塊に成つてゐる。門番はいつもより威勢が好い。)

主人。おれを寝かすのだつて。そんな事はしないで好いよ。おれは一寸び



つくりした丈なんだから。今思ふと誰だかずどんとやるとその後から棒  
だか板だかで頭の上を。

夫人。(傲慢に)私なんぞ一つもぶたれは致しませんよ、さあ入りませう。

主人。おれは中々手強く防禦したぜ。お前に見せたかつたがな。さつきあ  
の護謨靴を脱いでしまつたのも惜しかつたよ、あれでぶちのめしてやる  
所だつたに。

畫家。(夫人に笑顔で)どうです、あの元氣は。

主人。(熱心に)あの護謨靴でくらはしてやりたかつたなあ。(錠前屋に)お  
や、大將だね。

寡婦。まあそんな人のお相手は宜しいぢや御座いませんか。お部屋で少し  
お休みなさらなくては。

主人。では。

夫人。錠前屋さん、私のがお前さんに當つて。

錠前屋。(不愛想に)なあに當りやしませんよ。どいつだかおれの頭をぶち  
やがつたか。

門番。(傲慢に)それはこのおれ様だ。(夫人錠前屋及其他の人々を緊張して  
眺める。)

畫家。門番先生の働きぶりは見せたかつたなあ、ままるで地雷火だ。

トロシン。諸君、我輩もおつむりに一つ頂戴致しやした。

門番。(満足らしく)君をやつつけたのもこのおれだよ。

トロシン。諸君、どうぞ今の言葉をお忘れ下さいませんやうに。

門番。(トロシンに近寄り笑ひ乍ら隠しから瓶を取出す。)



夫人。(鋭く錠前屋を眺め)お前さんおひやでも上げやうかな。

錠前屋。水ぢや御免だ、ぐいといくやつならな。

主人。(錠前屋に)いやはや、手がつけれない。

夫人。もう關はない方が、あなた。

主人。もう藥の製造はおれはやめだよ。

畫家。それが好い、それが好い。

主人。(涙に咽ぶやうな聲で)だが待つてくれ、なぜあいつがおれにぶつて  
かかつたかその譯が知りたいんだ。おい、エゴル、おれがお前にどんな  
怨みに成るやうな事をした。

錠前屋。(愚鈍に)そんな事知らねえ。

寡婦。裁判所へ行けば何もかも分るよ、みんなお前さんに言つて聞かして

くれるから。

主人。(憤然と)そんな裁判所とは何事です。エゴル、おれはお前を尊敬し  
てゐるんぢやないか、お前は腕が好い、だからおれも拂ふ物は立派に拂  
つてゐる、それに何だつてまた。

錠前屋。(立上り沈鬱に憎々しく)もう後生ですから何にも言はねえで下さ  
う。

夫人。(きつぱりと力を籠め)あなたもうお關ひなさらないで、どうぞ。

畫家。(錠前屋に)君も行つた方が好いよ。

錠前屋。(粗暴に)いくよ。(よろめき乍ら歩き出す。門番とトロシンは柵の  
方に歩み寄り地上に座つて門番の持つてきた火酒をやり出す。錠前屋は  
黙つてそれに近付き座り込んで門番の手を握る。)



寡婦。何といふいやな人でせうね。

夫人。打ちやらかしておきませうよ。私達はもう参る事にして。

主人。(激して)どうもあいつはしやくに觸るぞ。何かとげを含んだやうな物の言ひ方をしやがる。ああいふ連中は太陽のやうに元氣で威勢好くなけりやならない筈だにな。

妹。(テラアスに現れる。白い服を着け髪を美しく珍しい形に捲いて、靜に嚴然とした様子で歩いてくる。顔は穩ならぬ謎のやうな笑ひを浮べてゐる。その背後から乳母)

妹。では皆さん、左様なら、何にも仰つてはいやよ。私はもう固い決心をしたのですから。私もう行つてよ。留めてはいやよ、遠い遠い所へ行つてもう永久に歸つてはこない事よ。まだ皆さん御存知ないの。(立止り小

聲で笑ひ乍ら獸醫の寫眞の裏に書いてある詩を読む。

わが愛する人は砂漠を行く

熱き砂の赤き海を

我は知る、遙けき青き彼方に

寂しさと悲しみにわが戀人は悩むを。

太陽は怒れる眼に似たり

沈黙の燃え上る眼差は

彼方にひとり悩むわが戀人を照せり

我は行きてその運命を分たん。

(小聲に唄ふ、不思議なる旋律。)



わが愛する人は丈高く瘦せたり  
われはその手に軽く美しくすがりて  
われら二人は蒼ざめし花の如くに  
赤き砂の上を吹き散りゆかん。

(沈黙、嘆息して更に續ける。)

太陽の燃ゆる光に焼け爛れて

我ら二人は砂の上をさまよひ

やがて死の如き荒野に埋もれん

相共にわが悩みを夢みつつ。

(物を案ずるらしく一同を見て微笑す。)之でおしまひなの。私ボリスさんに作つて上げたのよ。御存知でせう、あの方。(庭の方に歩み)本統に

皆さんはお氣の毒だわ、私心から御同情してよ。(乳母夫人を辛辣に咄め  
リイザに従ふ。)

夫人。(痛心の様子、小聲で)あなた、お分りになつて。

主人。(驚いて)巧い、實に巧いものだ、ワギン君、分つたかい。

畫家。(強く)それよりも君はリイザさんの氣がおかしく成つてゐるのが分つてるから。

主人。(信じないやうに)本統かい。それは、ヘレナ。

夫人。(小聲で)さあ行きませう、リイザさんについてゆきませうよ。(三人庭に出る。垣根の傍に錠前屋座り憎惡の目で三人を見送る。トロシンは何やら譯の分らぬ事を呟き、顫へる手で頭や肩を搔く。)

門番。大した事はねえよ、おれなんぞひどくぶちやがつたものだ。だがか



うして息があらあな。おつと來なすつたぞ。黙つた、黙つた、息の根が  
ありやひろいもんだよ。

畫家。(物を案するらしく。)

慰めもなく荒れたる砂漠にひとり  
燃ゆる砂の赤き海に。

幕。

大正十二年十月二十日印刷  
大正十三年十月十日發行

【定價一圓四十錢】

譯者 秦 豊 吉

發行者 後 藤 誠 雄  
東京市牛込區横寺町四三

印刷者 福 神 和 三  
東京市京橋區南紺屋町四

發行所

東京市牛込區  
横寺町四三

聚

英

閣

振替東京四七八六九  
電話牛込四六二



# 戯曲書類

著者	書名	定価	送料
モリエール作 井上 勇譯	ドン・ジユアン	二・三〇	・一八
ボウマルセエ作 井上 勇譯	ファイガロの結婚	二・二〇	・一七
ゴリキイ作 秦 豊吉譯	太陽の子	二・二〇	・一三
ストリントベリイ作 福田久道譯	基督	一・〇〇	・一五
長田 秀雄	亡き妻を哭く	一・五〇	・一五
中島 清	亡國行	一・二〇	・一三
倉田 百三	かたまる魂	二・〇〇	・一八
大坪草二郎	大海人皇子	一・八〇	・一七



516

275



終

